

「実習生の日比野克彦です」

「アール・ブリュット」をテーマとする四つの美術館、「みずのき美術館（京都府亀岡市）」、「鞆の津ミュージアム（広島県福山市）」、「はしまりの美術館」（福島県猪苗代町）、「葦土ミュージアム」（高知県高知市）の合同企画展「TURN」が話題になっている。監修者は、現代アートを牽引してきた日比野克彦さん。作品づくりの前に、施設で障害者といっしょに寝泊まりし、三ツ所目の高知では就労もするという。実習生となった日比野さんを追った。

「ピカソやマチスの絵を見ていると、この絵をどこで描いたんだらうって思う。ラスコーの洞窟壁画だって、どんな人が描いたんだらうと、すごく気になった。作品を語る前に、障害者と同じ時間を過ごしたかった」

障害者と触れることから

合同企画展「TURN」。副題は「陸から海へ（ひとがはしめからもつている力）」これは、展覧会というよりも、一つの大きなムーブメントといえる。

日比野さんの話では、「最初から陸から海へというキーワードはあったんですけど、人間が陸から、生命が生まれた海

へ、逆に遡行するような視点を持つという「じゃあ、その考えを企画に具体的に落としとどなるのか。四つの美術館のキュレーターが何度も協議したが、なかなか定まらなかった。

「作品というより、人そのものに焦点をあてよう」と、鞆の津ミュージアムの櫛野展正さんの発言から、プロジェクトは一挙に動き出した。「作品を見せるだけでなく、障害者の作品が生まれる現場をフィーチャーしたい」。いまま閉鎖的に感じられる入所施設を日比野さんに見てもらって、日比野さんの目を通して、障害者のことや、彼らが作品を生み出す現場の空気を感じてもらおう。七月末から、みずのき美術館や鞆の津ミュージアム、それぞれの運営母体の施設でステイした後、九月には高知の葦土ミュージアムで、はじめて、障害者と共に就労を体験することになった。

編集部＝文  
text by Kotonone  
岸本 剛＝写真  
photograph by Tsuyoshi Kishimoto